

道有林におけるコスジオビハマキの発生状況 (1977年)

鈴木重孝 上条一昭

1965年(昭和40)に旭川林務署管内の当麻町にあるトドマツ壮齡林(1928年植栽)で、コスジオビハマキによる被害が発見されてからすでに12年を経過した。一時は、被害が全道的に広がるのではないかと心配したが、1970年前後をピークに次第にこの害虫の数が減少しはじめ、一部を除いて50cmの枝1本当りの個体数がいずれも5匹以下となった。そこで、1975年にはハマキガ類の大発生が一段落したと判断し、各林務署に依頼していたハマキガ生息数調査を当分の間やめることにした(光珠内季報22号)。

しかし、コスジオビハマキの個体群密度が大発生以前のレベルに戻ったわけではない。以前にはあまり見られなかったこのハマキガが、今ではどこのトドマツ造林地でもみうけられるようになった。しかも、トドマツ造林地は拡大する一方であり、次々と成林してくるとコスジオビハマキの大発生にとって有利な条件がととのってくることになる。こうした理由から、ハマキガ類の発生状況には常に注意をはらっておく必要がある。

1977年は、5月初旬に降雪があり、低温の日が続いたが、5月中旬から6月中旬にかけて雨のほとんど降らない日が続き、少雨記録を更新するなどの異常気象であった。しかも、5月下旬から6月上旬にかけて真夏なみの気温が続いた。この高温乾燥がハマキガ類の発育速度を早め、生存率を高くしたとみえて、6月中旬の調査では、旭川78林班(1953年植栽)を除い

表 - 1 1976年と1977年のハマキガ類の数(6月調査)

調査地	種名	コスジオビハマキ	トウヒオオハマキ	タテスジハマキ類	モミアトキハマキ類	トドマツアミメハマキ	トドマツメムシガ	トドマツチビハマキ	その他のハマキガ	ハマキガ類合計
旭川経営区 79林班	1976年	0.28	0.15	0.13	0	0.88	0.42	0.03	0.02	1.92
	1977年	0.97	0.25	0.42	0.38	0.55	8.95	0.10	0.02	11.63
旭川経営区 78林班	1976年	2.10	0.78	1.27	0.15	0.07	1.72	0.27	0	6.35
	1977年	0.63	0.42	0.53	0.75	0.02	1.65	0.17	0	4.17
滝川経営区 36林班	1976年	0.40	0.03	0.18	0.28	0.05	0.18	0.03	0	1.13
	1977年	2.80	0.20	0.23	0.80	0.40	22.33	0.10	0.23	27.08
美瑛市 トドマツ集植所	1976年	2.83	0.45	0.63	0.21	0.67	0	0.07	0.03	4.90
	1977年	2.50	0.62	1.57	0.73	0.90	0	0	0.02	6.33

注：数値は、50cmの枝1本当りの個体数。

たいずれの調査地においてもハマキガ類の数が昨年より増加していた（表 - 1）。とりわけ、トドマツメムシガの数が、旭川 79 林班（1935 年植栽）、滝川 36 林班（1929 年植栽）の壮齢林において急にふえていた（図 - 1）。このトドマツメムシガは終齢幼虫でも体長 6~7 mm にしか達しない小さなハマキガで、ふつうはうっぺい前の幼齢林に多いとされてきた種である。それが急にふえたのであるから注意をする必要がある。というのは、かつてコスジオビハマキが大発生した時に、それに先行してこのトドマツメムシガと生態のよく似たトドマツアミメハマキという種の大発生がみられたこと、また今まで実施してきたハマキガ類の生息数調査結果が、ハマキガ類の数の増減はどの種も同様の傾向をもっていることを示しているからである。図 - 1 にコスジオビハマキとトドマツメムシガの数の年次変動を示したが、両者の数の増減はほぼ同一傾向を示している。

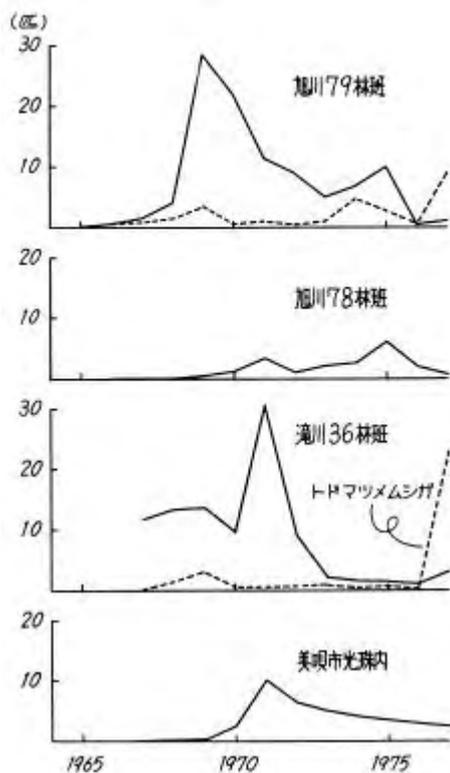


図 - 1 コスジオビハマキの個体数の変動

このようにハマキガ類の数の変動が同一の傾向を示すことは、発生予察という点からみると便利である。今年の例でいうと、トドマツメムシガの数が前記の場所で著しく増加したことは、他のハマキガ類も同じように増加傾向を示すと考えられるからである。実際、コスジオビハマキについてみると、旭川 79 林班で 0.97 匹、滝川 36 林班で 2.80 匹と、いずれも数は少ないが、昨年までの道有林におけるハマキガ生息数調査結果からみても、留萌 90 林班（天然林）と岩見沢 79 林班（1930 年植栽）で、コスジオビハマキが 1973 年以来ふえつづけ、1976 年にはそれぞれ 3.55 匹、5.23 匹まで達している。したがって、全道的な調査が実施されていない今年の調査結果では正確なことはりえないが、コスジオビハマキについては再び個体数が増加する傾向にあるのではないかと思われる。

ある害虫の発生予察を正確に行うためには、その種の生態をくわしく調べることはもちろん、他の種との関係や色々な環境条件の影響など多くの点にわたって調べることが必要である。そして何よりも、長期にわたる発生状況についての資料をできるだけ広い地域から集め、蓄積する必要がある。トドマツを加害するハマキガ類については一応 13 年間の資料があるが、発生予察の分析するにはまだ十分とはいえない。今後とも資料の蓄積を続けたいと思っている。

（昆虫野兎鼠科）